

深夜の雪

夕

あたたかいガスだんろの火は

メ・セロ

ほのかな音を立て

し

しめきつた書斎の電燈は

うぐい

しづかに、やや疲れ気味の二人を照す

うぐい

宵からの曇り空が雪にかはり

うぐい

さつき窓（まど）から見れば

うぐい

もう一面に白かったが

うぐい

ただ音もなく降りつもる雪の重さを

うぐい

地上と屋根と二人のこころとに感じ

し へ ん ー ー

むしろ楽みを包んで軟かいその重さに

う ん ー ー ー ー ー

世界は息をひそめて子供心の眼をみはる

し へ ー ー ー ー ー

「これみや、もうこんなに積つたぜ」

ー ー ー ー ー

と、にじんだ声が遠くに聞え

し へ ー ー ー ー

やがてぽんぽんと下駄の歯をはたく音

お ー ー ー ー ー

あとはだんまりの夜も十一時となれば

う ー ー ー ー ー

話の種さへ切れ

あ、

紅茶もものうく

あ、

ただ二人手をとって

声の無い此の世の中の深い心に耳を傾け

流れわたる時間の姿をみつめ

ほんのり汗ばんだ顔は安らかさに満ちて

ありとある人の感情をも容易たやすく受けいれようとする

又ぽんぽんぽんとはたく音の後から

車らしい何かの響き——

「ああ、御覧なさい、あの雪」

と、私が言へば

答へる人は忽ち童話の中に生き始め

— / 2 6 9

かすかに口を開いて

o q

雪をよろこぶ

o L

雪も深夜をよろこんで

o i L

数限りもなく降りつもる

o /

あたたかい雪

+ p

しんしんと身に迫って重たい雪が——

“ o 6 9